これは、『中唐文学会報』第 27 号
への投稿原稿です。

元白交往詩初探

―白居易「八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九」詩を起点として―

柳川　順子（県立広島大学）

はじめに

中唐を代表する詩人白居易（七七二―八四六）は、その友人元稹（七七九―八三一）に宛てた相当数の詩や書簡を自らの『文集』中によく保存しており、二人の間で交わされた詩の往還については、花房英樹氏の研究により[1]、詳しくその対応関係が復元されている。白居易と元稹との交友は、二人が揃って吏部試の書判抜萃科に合格し、ともに校書郎を務めることとなった貞元十九年（八〇三）の前年の秋から[2]、元稹が赴任したばかりの鄂州（湖北省武漢市）で急逝した太和五年（八三一）に及ぶまで、三十年近くにわたってほとんど途絶することなく続いた。転変の目まぐるしい当時の官界を思えば、これは驚嘆に値することだろう。とはいえ、二人の間には、ずっと変わらない友情が保持されていたわけではないようだ。それぞれが置かれた境遇の変化に伴い、その時々、それぞれの胸に去来した心情は一様ではなく、当然その相手に寄せた詩の言葉のあり様には、微妙な濃淡の違いや温度差が認められる。二人の友情については、すでに先学が論じているところではあるが[3]、その交流の心情的実相については、なおも考察の余地が残されているように思う。この視点はきわめて微細なものではあるけれど、友情という人間の普遍性に触れるという意味でも、また、唐代の官僚社会を生きる文人たちの一隅を垣間見るという意味でも、それほど無意味でもない考察とはなり得るだろう。

さて、元稹に宛てた白居易の詩に、「八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九（八月十五日の夜、禁中にて独り直し、月に対して元九を憶ふ）」（『白氏文集』巻十四、〇七二四）[4]と題する作品がある。『千載佳句』や『和漢朗詠集』に採録されて、日本でも多くの人々に愛されてきた[5]名作であるが、これを贈られた肝心の元稹は、白居易の篤い友情に感激するかと思いきや、それに応酬した「酬楽天八月十五夜、禁中独直、玩月見寄」詩を見る限り、意外にも少しくその心証を害したらしく感じられる。これはいったいどういうことか。本稿では、元稹の不興を買ったこの白居易詩を考察の起点として、本詩が作られた元和五年（八一〇）[6]の前年から数年先の元和十二年に至るまで、二人の間に交錯した心情の一端を、その詩の読解を通して跡付けてみたい。

一

まず改めて、考察の起点となる白居易の「八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九」詩

を示しておこう[7]。元和五年、八月十五日の夜、長安の大明宮内に一人で宿直し、満月に向きあいつつ、遠くに貶謫されている元稹のことを思い起こして詠じた詩である。元稹は、この年の三月、東都洛陽詰めの観察御史から、長江中流域に位置する江陵府（湖北省）の士曹参軍に左遷された。その降格の理由は、観察御史として河南尹（洛陽の長官）房式の違法行為を摘発したその対応のあり様が、年少者にあるまじき強権的な態度であるとされたためである（『旧唐書』巻一六六・元稹伝）。当時、元稹は三十二歳、制科に及第して上級官僚の仲間入りをしてから四年目のことであった。一方の白居易は、同年四月、左拾遺の職が任期満了となり、翌月、京兆府戸曹参軍に移ったが、天子直属の官である翰林学士には引き続き在職している[8]。彼は元稹よりも七歳年上の三十九歳で、この時まだ左遷という挫折は経験していない。

銀台金闕夕沈沈　　銀台　金闕　夕べに沈沈たり
独宿相思在翰林　　独り宿して　相思ひて翰林に在り
三五夜中新月色　　三五夜中　新月の色
二千里外故人心　　二千里外　故人の心
渚宮東面煙波冷　　渚宮の東面　煙波　冷やかに
浴殿西頭鐘漏深　　浴殿の西頭　鐘漏　深し
猶恐清光不同見　　猶ほ恐る　清光　同じくは見えざらんことを
江陵卑湿足秋陰　　江陵は卑湿にして　秋陰　足れば

これを通釈すれば以下のとおり。銀台門や金鑾殿が夕闇の底に深々と沈み込んでゆくこのとき、私は一人、翰林院に宿直して、君のことを思っている。八月十五日の夜空に昇ったばかりの満月の色、二千里の彼方にいる旧友の心。江陵の庁舎の東方では、靄の立ちこめた水面が冷やかに波立っているだろう。こちらでは、浴堂殿の西方に、時を告げる鐘の音や水時計が深まる時を刻んでゆく。（君もこの明月を眺めているには違いないが、）それでもなお心配なのは、この清らかな光が君の目には同じように見えていないのではないかということだ。江陵の地は低く湿っていて、秋の空も嫌になるほど曇ってばかりだというから。

白居易が宿直している「翰林」は、大明宮の西方の隅にあり、そのすぐ西には「銀台」すなわち右銀台門が建っている。大明宮の中央には、南から北に向かって、天子が朝会を催す含元殿、政務を執る宣政殿、日常的居所である紫宸殿が建ち並び、詩中にいう「金闕」とは、ここでは、この紫宸殿のすぐ北側にある文人たちの詰め所、金鑾殿を指すと思われる[9]。第六句の「浴殿」は、同じ紫宸殿のすぐ東側に位置し、その「西頭」一帯には、白居易が宿直している翰林院も含まれる[10]。

この「浴堂」に対置される第五句の「渚宮」は、『春秋左氏伝』文公十年に見える楚国

の宮殿の名で、この典雅な名称は、元稹の勤務する江陵府を指す。このように、白居易は自身が宿直する長安大明宮と、元稹のいる彼方の江陵とを対比的に詠じた上で、その上方の夜空に同じく懸かる満月を思い描き、江陵という低湿な土地では、この同じ月の光が鮮明には見えていないのではないか、と親友の置かれた境遇を気遣っている。見たところ、崇高な輝きを放つ友情の詩である。

ところが、この白居易の詩情は、元稹にはまっすぐに受けとめられなかったようだ。今、元稹の応酬詩「酬楽天八月十五夜、禁中独直、玩月見寄（楽天が八月十五の夜、禁中に独り直して、月を玩びて寄せらるるに酬ゆ）」（『元氏長慶集』巻十七）[11]を読み解きながら、筆者がこう判断した理由を示したい。

一年秋半月偏深　　一年　秋半ばにして　月は偏（ひとへ）に深し
況就煙霄極賞心　　況んや煙霄に就きて賞心を極むるをや
金鳳台前波漾漾　　金鳳台前　波　漾漾たり
玉鉤簾下影沈沈　　玉鉤簾下　影　沈沈たり
宴移明処清蘭路　　宴は明処に移して蘭路を清め
歌待新詞促翰林　　歌は新詞を待ちて翰林を促せるらん
何意枚皐正承詔　　何ぞ意（おも）はん　枚皐が正に詔を承くるとき
瞥然塵念到江陰　　瞥然たる塵念　江陰に到らんとは

通釈は以下のとおり。一年の中でも、秋の半ばとなると、月はことさらに空の奥まったところに懸かるものだが、まして靄にかすんだ空に臨んで月影を愛でるのだから、その見えにくさときたら…。金色の鳳凰のごとき姿の高楼の前には、波立つ長江の水面が揺れ動き、玉作りの鉤で巻き上げた簾の下には、月の光が靄の向こうに深々と沈んで見えている。君のいる大明宮では、宴席が明るい場所に移されて、香りたつ蘭の道は清められ、翰林院の文人たちに、早く新しい歌詩を作るようにと詔が下っているだろう。全く思いがけないことに、枚皐殿はちょうどその詔を承ったとき、ちらりと俗念を生じて、長江のほとりにいる私にまで思いを馳せてくださった。

第三句の「金鳳台」について、先行研究の多くはこれを、魏晋南北朝時代以来、権力の中枢に近かった中書省を意味する鳳凰池（『通典』巻二十一・職官三）、もしくはそう名付けられた禁中の池の畔に立つ高楼と見ている[12]。すると必然的に、これより以降の六句はすべて、元稹が白居易のいる大明宮の様子を想い描いたものだということになるが、それだと、まず前二句とのつながりが希薄になる。金鳳台前には水のゆらめきがあり、玉鉤簾下に見える月は、靄にかすむ夜空の奥底に深く沈んでいるのであるから、この第三・四句は、冒頭の二句と緊密に結びついていると見るのが妥当だろう。また、先行研究の語釈に従うと、詩全体の比重が大きく宮中の情景に傾くことになるが[13]、これ

は、一首の詩の捉え方としてややアンバランスではないか。そう考えて、「金鳳台」は元稹の勤務する江陵府の庁舎、つまり、白居易詩に見えていた「渚宮」と同じ建造物を指す美称と解釈した。

こう捉えるならば、前半の四句は、元稹が江陵で眺める月の様子を詠じているということになるが、ここで目に留まるのは、今検討した「金鳳台」を始め、「玉鉤簾下」「煙霄」「極賞心」といった優美な詩語がこの部分に散りばめられているということである。これは、白居易の「猶恐清光不同見、江陵卑湿足秋陰」という詩的問いかけに対して、美しい文辞で応酬してみせたものであり、また、その憐れむがごとき気遣いに対する、若干の反発を含んだ返答であったのかもしれない。こちら「卑湿」の地でも、このとおり十分に風流を楽しんでいると見栄を張っているかのような口ぶりである。

さて、後半の四句は、白居易の側に視点を移し、彼が身を置いている大明宮中での宴の様子を思い描いている。五句目に見える「清蘭路」は、『文選』巻十三、謝荘「月賦」にいう「迺清蘭路、肅桂苑（迺ち蘭路を清め、桂苑を肅む）」を踏まえて、白居易が詰めている大明宮中で、詩歌の創作を伴う宴席が準備されることをいう。「月賦」では、宴の主催者は魏の武帝曹操の息子である曹植、この主人に辞賦の制作を命じられるのは、建安文壇を代表する文人王粲という設定であり、当然それは元稹にも意識されているはずだ。ところが、この設定はその後に引き継がれない。第七句で詔を承る人物は、三国魏から時代を大きく遡り、前漢中期の枚皋になぞらえられているのである。枚皋は、宮廷文人枚乗の庶子で、自ら宮闕に赴いて枚乗の子であることを名乗り、武帝に招き入れられてお抱え文人となった人物で、その作風は軽佻浮薄、拙速に筆を運ぶタイプの倡優的文人であったようだ（『漢書』巻五十一・枚乗伝附枚皋伝）。このような人物に、元稹は白居易を喩えているのである。

こうしてみてくると、白居易から送られて来た前掲の詩を、元稹はあまり嬉しい気持ちで受け取ってはいないと判断せざるを得ない。その根底にはおそらく、理不尽とも思える理由で左遷されたことに対する憤懣に加え、皇帝直属の文官として禁中に詰める白居易に、自分のこの無念さはわかるまい、といった拗ねるような反発するような気持ちが渦巻いていたのではあるまいか。

この元稹の屈託は、結びに見える「瞥然塵念」という語が端的に表している。大明宮という清らかな別世界にいる白居易から、「卑湿」な土地柄の江陵に貶謫されている自分に向けて寄せられた思いを指して、「塵念」すなわち俗塵にまみれた想念と言い切っていることにまず注目したい。元稹は、世間から隔絶した特別な空間に身を置く白居易にとって、都を追放された自分に思いを馳せるということは、汚れた塵を蒙るに等しいと言っているのである。しかもその想念は、ひたすらに自分ひとりに向けられたものではな

く、華やかな宮中での活動の合間に、ついでのようにして分け与えられた一瞥なのだと元稹は捉えている。この四字からは、自尊心を打ち砕かれた元稹の憤懣や苛立ち、白居易に対する嫉妬、また、その惨めさを紛らわす道化的自己卑下がないまぜになって浮かび上がってくるようだ。

二

白居易の「八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九」詩は、前章で見たとおり、貶謫の身である元稹の心情を少なからず波立たせたらしい。では、白居易はどのような思いからこの詩を彼に贈ったのだろうか。この前後にやり取りされた二人の詩を縦覧すれば、そして、元稹の処遇について白居易が三たび異議を申し立てたことを想起すれば[14]、彼の元稹に対する友情には一片の曇りもなかったと言えるだろう。もちろん、元稹の現在の境遇をリアルに想い描けなかった甘さはあったかもしれない。だが、彼は彼なりに、親友を元気づけ得るある目算があってこの詩を作り、江陵まで送り届けたのだろうと思われる。その目算とは何か。話はその前年に遡る。

江陵に左遷される前年の元和四年（八〇九）三月七日、元稹は観察御史として東川（四川省）へ赴くこととなり、その途上、三十二章の詩を賦した。これを、白居易の弟であり、当時秘書省校書郎を務めていた白行簡が手ずから書写し、この詩集は「東川巻」と名付けられた（『元氏長慶集』巻十七、「使東川」序）。その中に、「江楼月」と題する次の詩がある。

嘉陵江岸駅楼中　　嘉陵江岸　駅楼の中
江在楼前月在空　　江は楼前に在り　月は空に在り
月色満牀兼満地　　月色は牀に満ち　兼ねて地に満ち
江声如鼓復如風　　江声は鼓の如く　復た風の如し
誠知遠近皆三五　　誠に知る　遠近皆三五なりと
但恐陰晴有異同　　但だ恐る　陰晴に異同有らんかと
万一帝郷還潔白　　万一　帝郷　還た潔白ならば
幾人潜傍杏園東　　幾人か潜かに傍（ちかづ）くらん　杏園の東

通釈は以下のとおり。嘉陵江の岸辺、駅舎の高楼の中にいて、耳目を澄ませば、江水は高楼の前を流れ、月は空に懸かっている。月光の色はベッドに満ち溢れ、そして地上にもあまねく満ちていて、江の水音は、打ち鳴らす太鼓のようであり、また吹きすさぶ風のようでもある。たしかに、都もここも、いずこも同じ十五夜であることはわかってはいるが、ただ、そちらも晴れているかどうか、天気に違いがあるのではないかと心配だ。もし、都がまた白々と輝く清らかな光に照らされているならば、何人か、こっそり

と杏園の東に近づいて、昔のように月を愛でているだろうか。

最後の句に見える「杏園」は、長安城内南東寄りの通善坊にあった庭園で、進士に合格した人々が祝賀の宴を張った場所として知られる[15]。その東方に広がるのは、これもまた游宴の場として有名な曲江で、そこに「潛傍（ひそかに近づく）」人々を元稹は思い浮かべているのだが、これらの人々に関しては説明を後へ回そう。

さて、この詩の最後から三句目「但恐陰晴有異同」に見覚えはないだろうか。先に見た白居易詩の最後から二句目「猶恐清光不同見」と、その発想がよく似ている上に、「恐」という語も共有されている。元稹を聊か不機嫌にさせた白居易の前掲詩は、その前年に作られた、この元稹自身の「江楼月」を踏まえて作られたのではないかと筆者は推測する。

更に、白居易の詩には「但」に代わって「猶」とあったが、これはなぜだろう。この言い方は、元稹も当然この同じ月を見ているはずだという暗黙の了解が前提にある。白居易はこの語句の直前に、自身が宿直している大明宮と、元稹が勤務する江陵の庁舎とを対句で詠じていた。したがって、白居易の脳裏には、冷ややかな波がゆらめく彼方の「渚宮」の東方で、自分と同じ月を眺める元稹の姿がくっきりと映じていたには違いない。だが、詩の中で、君も月を見ているだろうなどと言語化することはしていない。それは自分たちにとっては当たり前のことだから。そんな言外の声が聞こえてきそうな表現である。これがあながち空想でもないことは、この元稹詩に応酬した白居易の「江楼月」によって明らかにすることができるが、その詩を示す前に、本詩の成立背景を押さえておきたい。

元稹「江楼月」詩には、次のような自注が付せられている。

嘉川駅望月、憶杓直・楽天・知退・拒非・順之数賢、居近曲江、閑夜多同歩月。

嘉川駅にて月を望み、杓直（李建）・楽天（白居易）・知退（白行簡）・拒非（李復礼）・順之（庾敬休）の数賢、居ひは曲江に近く、閑夜に多く同に歩月せしを憶ふ。

ここに挙げられたのは、いずれも科挙に合格して官僚となった人々で、李建は、貞元十四年の進士、白居易は貞元十六年の進士で、同十九年に書判抜萃科に合格、李復礼も同年、書判抜萃科に合格した人物、白行簡は元和二年の進士、庾敬休は、具体的な時期は不明ながら、進士、博学宏詞科合格を経て秘書省校書郎となった人物である[16]、また、彼らは相互に文学的交流のある友人同士でもあった[17]。そうした人々であればこそ、月を愛でつつ曲江のほとりを散歩するという風流な遊びにも打ち興じたのだろう。なお、それがひそかに為されたのは、唐代、夜間の自由な外出が禁じられていたためかと思われる[18]。

この自注に登場する人々は、「江楼月」を含む詩集「東川巻」の第一の読者となったに

違いない。「東川巻」は、まず元稹を取り巻く友人たちの間で共有された作品集だったのである。その仲間のひとりである白居易は、この内の十二篇に応酬し、「酬和元九東川路詩（元九が東川路の詩に酬和す）」と題するその詩群の初めにこう記している（『白氏文集』巻十四、〇七五七）。

十二篇、皆因新境追憶旧事。不能一一曲叙。但随而和之。唯予与元知之耳。

十二篇は、皆新境に因りて旧事を追憶す。一一曲（つぶ）さに叙ぶること能はず。但だ随ひて之に和す。唯だ予と元と之を知るのみ。

それでは、自分と元稹とだけが知っている出来事を、白居易の「江楼月」（〇七六一）はどう詠じているだろうか。

嘉陵江曲曲江池　　嘉陵江の曲と曲江の池と
明月雖同人別離　　明月は同じと雖も　人は別離す
一宵光景潜相憶　　一宵の光景　潜かに相憶へども
両地陰晴遠不知　　両地の陰晴　遠くして知らず
誰料江辺懐我夜　　誰か料（はか）らん　江辺にて我を懐ふ夜
正当池畔望君時　　正に池畔にて君を望む時に当たりしを
今朝共語方同悔　　今朝　共に語りて　方（まさ）に同じく悔ゆ
不解多情先寄詩　　多情　先づ詩を寄することを解（え）ざりしを

通釈は以下のとおり。嘉陵江の曲（くま）と曲江の池、明月は同じではあっても、これを眺める人は離れたところにいた。一夜の月明かりの下、二人は心ひそかに相手のことを思っていたが、双方の土地の天候がどうであるか、遠くて知るよしもなかった。いったい誰が想像できただろう、君が嘉陵江の岸辺で私のことを思っていた夜、まさしく私も曲江のほとりで君のことを思って遠くを眺めていたとは。今日、君と語らいつつ、まさしく二人揃って同じように後悔したことだ。あふれんばかりの情に任せて、自分から真っ先に詩を寄せることができなかったのが残念でならないと。

この白居易の詩は、元和四年（八〇九）五月、元稹が出張先の東川から長安に戻り、次いで洛陽へ派遣されるまでの間、二人で語らい合ったことに基づいて作られている。最後から二句目の「今朝」とは、本日の意であり、その再会の日を指していう。注目したいのは、先に示した元稹の「江楼月」が、友人たち複数名に向けられた詩であるのに対して、本詩はそれを、白居易と元稹とのみが知る話柄へと転換させていることである。この親密さは、遠くはなれた場所で、ちょうど同じ時に、同じ月を見ていたという偶然性に光を当てることによって一層際立つ。更に、第四句の「両地陰晴遠不知」は、元稹詩にいう「但恐陰晴有異同」を踏まえつつ応酬したものであり、こうした表現には、相手に対する眼差しの細やかさが感じられる。前掲の白居易詩「八月十五日夜、禁中独直、

対月憶元九」八月十五日夜」に「猶恐清光不同見」とあって、この「猶」という語の向こう側に、元稹も同じ月を眺めているはずだという前提を先に読み取ったのであったが、白居易がそう確信することができたのは、直接的には、白居易のこの「江楼月」に詠じられているとおり、まだ記憶に新しいその前年、同じような局面のあったことを二人で語り合っていたからではなかったか。

加えて注目されるのは、白居易「江楼月」詩の最後の二句である。自分たちは、離れた場所で、同じように月を愛でつつ相手のことを思っていたけれど、そのことを詩に詠じてまっすぐ相手に送り届けることをしなかった。それがなんとも残念であると語らい合ったのだ、と述べている。ということは、次にまた美しい満月の夜に巡り合ったならば、今度は自分から相手に詩を贈ろうと、二人は心に期したのではあるまいか。とはいえ、この対話の後、元稹には月を愛でるような余裕を持つことが困難であったかもしれない。前述のように、五月、東川から帰京した彼はすぐに東都洛陽に向けて発ったが、七月九日には妻の韋叢を亡くすという不幸に襲われた。そして、翌年の二月に河南尹の房式を摘発、三月には江陵に左遷されている。その途上での心境は、白居易「和答詩」（『白氏文集』巻二、〇一〇一―〇一一〇）の元となった彼の原作詩（『元氏長慶集』巻一・二）に生々しい。江陵に着任後の六月十四日、当地の同僚たちと長江に舟を泛べて月を愛でたりもしているが（『元氏長慶集』巻十一「泛江玩月十二韻」序）、それですぐに傷心が癒えるというわけにはいかなかっただろう。一方の白居易も、妻を亡くした元稹を慰める詩を作り[19]、元稹が左遷されると、その処遇に対する異議を再三申し立て、その一方で、前掲「和答詩」の序（〇一〇〇）にも記されているように、官僚としての職務に忙殺される毎日を送っていた。そうした日々が一段落したある秋の夜、彼はひとり宿直する大明宮で、林立する宮殿の向こう側から差し上る満月に目を奪われ、思わず遠くにいる親友のことを思った。そして、一年ほど前に彼と交わした言葉を再び鮮明に思い起こす。かくして出来た詩が、「八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九」であったと筆者は考える。しかしながら、この白居易の思いは、失意の底に沈む江陵の元稹には真っ直ぐに届かなかった。

三

元稹の「酬楽天八月十五夜、禁中独直、玩月見寄」に見えていた「瞥然塵念」は、この詩が作られた元和五年（八一〇）から七年後の元和十二年、今度は、白居易が元稹に宛てた書簡「与微之書」（『白氏文集』巻二十八、一四八九）の中に丸ごと現れる。白居易のこの表現的行為を、私たちはいったいどう解釈すればよいだろうか。

この書簡は、元和十年に白居易が江州司馬に左遷されてから、足掛け三年が経過した

年の四月十日の夜に書かれた。今、「瞥然塵念」の語が登場するまでの梗概を示せば次のとおりである。まず彼は、元稹からの便りが途絶えてから二年になろうとしていることを嘆きつつ、なおも自分たちが深い友情で結ばれていることを強調し、江州に着任してすぐ、元稹が病を押して便りを寄越してくれたことへの感謝と、「聞楽天授江州司馬（楽天が江州司馬を授けらるるを聞く）」詩（『元氏長慶集』巻二十）に対する感激を述べる。次いでたっぷりと綴られるのは、江州での安泰な暮らしぶりとその心中である。近況を詳しく述べたのは、元稹が自分からの手紙を待ち望んでいるだろうと思うからであるという。

さて、彼がこの書簡を書き終わったのは、思いがけなくもちょうど夜が明けようとしてする時分であった。頭を挙げれば山籠もりの僧侶の姿が目に入るばかりで、耳には山猿や谷を渡る鳥たちの哀しげな鳴き声が聞こえてくる。こうした描写の後に登場するのが「瞥然塵念」であるが、今、その文脈を正確にたどるため、これより以降は原文で示したい。

平生故人、去我万里。瞥然塵念、此際暫生。余習所牽、便成三韻云、

平生の故人、我を去ること万里なり。瞥然たる塵念、此の際に暫し生ず。余習に牽かれて、便ち三韻を成して云ふ、

憶昔封書与君夜　　憶へば昔　書を封じて君に与へんとせし夜
金鑾殿後欲明天　　金鑾殿の後　明けんと欲するの天
今夜封書在何処　　今夜　書を封じて何れの処にか在る
廬山菴裏暁灯前　　廬山菴の裏（うち）　暁灯の前
籠鳥檻猿倶未死　　籠鳥　檻猿　倶に未だ死せず
人間相見是何年　　人間　相見ゆること是れ何れの年ならん

微之、微之。此夕我心、君知之乎。楽天頓首。

微之よ、微之よ。此の夕べ我が心、君は之を知るや。楽天頓首。

このように、万里の彼方にいる古馴染みの親友を思い、暫し生じたのが「瞥然塵念」である。では、なぜここで、白居易はこの語を持ち出したのだろうか。その疑問を解く鍵は、この直後に続く詩の中に示されているかもしれない。身に染みついた習慣で、即興的に出来上がったというその三韻の詩（『白氏文集』巻十六にも「山中与元九書、因題書後」（〇九八五）と題して収載）を通釈すれば次のとおりである。

思えば昔、書簡に封をして君に送り届けようとした夜、大明宮中の金鑾殿の背後には夜明けの空が広がりつつあった。今夜、どこで書簡に封をしているかというと、廬山の草庵の中、明け方の灯の前である。籠の中の鳥も檻の中の猿も、ともに未だ死んではいない。人間界で再会するのはいつになるであろうか。

この詩の一・二句目にいう書簡とは、「禁中夜作書与元九（禁中にて夜に書を作り元九に与ふ）」（『白氏文集』巻十四、〇七二三）に次のように詠じられているそれである。

心緒万端書両紙　　心緒　万端　書　両紙
欲封重読意遅遅　　封ぜんと欲して　重ねて読み　意　遅遅たり
五声宮漏初鳴後　　五声の宮漏　初めて鳴りて後
一点窓灯欲滅時　　一点の窓灯　滅えんと欲する時

通釈は以下のとおり。伝えたい思いは無限にあるのに、書いた手紙は二枚だけだ。封をしようとして、読み返せば、言い足りないことばかりが目について気が進まない。宮中の水時計が、五更（一夜を五つに分けた最後の時間）を告げて鳴ったばかりだ。今、窓辺の一点の灯が燃え尽きようとしている。

この〇七二三詩は、先に見た「八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九」と同年の作だとされている[20]。詩の背景となっているのも、同じ禁中の夜である。毎日郵便が届けられるわけではない当時の状況を思えば、あるいはこの二篇の詩は、同じ機会に書簡とともに白居易から元稹のもとへ届けられたかもしれない。だとすると、この白居易の「禁中夜作書与元九」は、自ずから「瞥然塵念」という語を含む元稹の応酬詩「酬楽天八月十五夜、禁中独直、玩月見寄」をも想起させることになるだろう。それを、白居易は今、廬山の草堂でしたため、通州の元稹に送り届けようとする書簡と対置させている。そして、この草堂で詠じた詩は、暫時生じた「瞥然塵念」によってできたものである。

白居易は、かつて大明宮から江陵の元稹に書き送った思いが、相手からしてみれば「瞥然塵念」であったことを克明に記憶していた。そして、その数年前の思いが、今、江州に貶謫された境遇にあってもなお変わりないことを、この同じ語を用いることによって元稹に伝えようとしたのではなかったか。いや、変わりがないというよりも、深化したというべきか。「籠鳥檻猿倶未死」という句が、そのことを力強く物語っている。左遷という境遇を知った今の自分は、あの時の君の気持が痛いほどわかる。官界の網に捕えられ、自由を奪われた情況にある二人だが、我らはまだ死んではいない。白居易はそう相手を励ましているのである。

むすびに代えて

前章で検討した白居易「与微之書」は、元稹にどう受け止められただろうか。「得楽天書（楽天が書を得たり）」と題する七言絶句（『元氏長慶集』巻二十）[21]には、遠方からの書簡が門を入って来るなり涙が先にあふれ出て、妻や幼い娘をたいそう驚かせたことが詠じられている。そして、書簡の最後に記されていた三韻の詩に対しては、次に示す「酬楽天書後三韻（楽天が書の後の三韻に酬ゆ）」詩（『元氏長慶集』巻二十）がこれに応え

ている。

今日廬峰霞遶寺　　今日　廬峰に　霞　寺を遶り
昔時鸞殿鳳迴書　　昔時　鸞殿に　鳳　書を迴らせり
両封相去八年後　　両封　相去ること八年の後
一種俱云五夜初　　一種　俱に云ふ　五夜の初め
漸覚此生都是夢　　漸く覚ゆ　此の生は都(すべ)て是れ夢なりと
不能将涙滴双魚　　涙を将て双魚に滴らしむること能はず

通釈すれば以下のとおり。今日、廬山の峰では霞が寺を取り囲み、昔日、金鑾殿では鳳が書簡を携えて旋回した。二通の封書は、足掛け八年の時を隔てても、揃って五更になったばかりの夜明けの時を詠じている。この人生はすべてが夢だと次第にわかってきた私は、涙を封書に滴らせるわけにはいかない。

白居易から送られた二通の封書は、それが書かれた時間も空間も遠く隔たっていながら、いつも変わらないのは、そこに夜明け前という時が刻印されていることだと元稹はいう。彼の眼には、一晩中、自分のことに思いを馳せて手紙をしたためてくれた、いつも自分の一番の理解者でいてくれた白居易の姿がありありと映じていたのだろう。この世はすべてが夢だと言い切る最後の二句は、一見したところクールさを装っているかのようでもあるのだが、「不能」という措辞には、白居易からの深い友情をその腕いっぱいに受け取って、懸命に涙をこらえている彼の姿が見え隠れしているようだ。

ところで、元稹はかつて、本詩にいう「昔時鸞殿鳳迴書」、すなわち前章にその原文を示した白居易の「禁中夜作書与元九」詩に対して、実は「書楽天紙（楽天の紙に書す）」（『元氏長慶集』巻十八）と題する次のような応酬詩を作っている。

金鑾殿裏書残紙　　金鑾殿裏にて残紙に書し
乞与荊州元判司　　荊州の元判司に乞与すといふ
不忍拈将等閑用　　拈将して等閑に用ふるに忍びず
半封京信半題詩　　半ばは京信を封じ　半ばは詩を題せん

これを通釈すれば以下のとおり。金鑾殿の中で、朝廷から支給された紙の残りに書き記し、荊州の元判司に与えるという。この紙をつまみ上げていい加減に用いるには忍びない。半分には都への便りをしたため、半分には詩を書きつけることとしよう。

一句目の「残紙」とは、王朝から諫官に支給される紙の残りをいい、たとえば「酔後走筆、酬劉五主簿長句之贈（酔後に筆を走らせ、劉五主簿が長句の贈に酬い)……」（『白氏文集』巻十二、〇五八四）に、「月慙諫紙二百張（月々に慙づ　諫紙二百張)」と見えているが、それを敢えて残り物と称していることに目が留まる。また、二句目の「荊州元判司」は、意味としては荊州で士曹参軍を務める元稹を指し示すだけだが、「判司」と

は州郡の属官をいい、一句目の「金鑾殿」との落差が際立つ。しかも、その上にある「乞与」は、上位者が目下の者に与えるというニュアンスを伴う言葉である。三句目「不忍拈将等閑用」も、かすかな不協和音を感じさせる。「拈」はつまみあげるの意で、それに接尾辞の「将」が付く口語的表現。続く「等閑」とあわせて、それをすることは「不忍」と言っているのだが、却って、そうしたぞんざいな行為が一旦は彼の念頭に上がったのかとさえ思わせる表現である。このように見てくると、元稹の「書楽天紙」詩は、先に見た「酬楽天八月十五夜、禁中独直、玩月見寄」詩にも増して、何かひどく屈折したものを内に蔵する作品だと言わざるを得ない。その詩題としても、たとえば、「楽天が紙を贈らるるに酬ゆ」ではなくて、楽天の紙に書くのである。

白居易が大明宮の中から江陵の元稹に書き送った二篇の詩、「禁中夜作書与元九」と「八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九」とは、以上の検討を通して見る限り、いずれもその送り手の思いとは裏腹に、元稹の心情をひどく逆なでしてしまったようである。では、このことに白居易自身は気づいていなかっただろうか。そうではあるまい。気づいていなければ、八年後の書簡の中に、「瞥然塵念」という語を刻み込むことはなかったはずだ。一方、これくらいのことで崩壊する友情ではないと、彼は心の底から確信してのでもなかったか。このことは、同時期に二人の間を往来した詩の数々が雄弁に物語るところである。その自信があればこそ、白居易は元稹の不機嫌を鷹揚に受けとめ、なおも相手への友情を保つことができたのではないか。先に示した元稹の「酬楽天書後三韻」詩は、そうした白居易の長年にわたる篤い思いに揺さぶられて出来たものだろう。その結びにいう涙には、二人の積年の友情が走馬灯のように映じていたに違いない。

なお、本稿で取り上げたのは、白居易と元稹の青壮年期における交往詩のごく一部である。そして、そこに読み取ることができた二人の心情の交錯は、同時期、二人の間で交わされた数々の唱和詩の価値を少しも減ずるものではない。むしろ、それに奥行きを与えるものだろう。また、彼らの交友はこの先も十数年にわたって続く。その時と環境の移ろいが、二人の間柄をどう変質させていくか、あるいは一貫して変わらないのか、それは今後の課題である。

---

1 花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、1960 年）312―340 頁、花房英樹『白居易研究』（世界思想社、1971 年）187―286 頁を参照。また、元白詩の対応表は、花房英樹『元稹研究』（彙文堂書店、1977 年）213―217 頁にも収載されている。

2 花房前掲書〈1977〉第一部「年譜」を参照。元稹の閲歴については以下同様。

3 花房前掲書〈1971〉のほか、平岡武夫『白居易（中国詩文選 17）』（筑摩書房、1977 年）は、その著書の大半が、官界に入って間もない時期における元白二人の友情を論

ずることに当てられている。また、金在乗「白居易と元稹」(『白居易の文学と人生Ⅱ（白居易研究講座第二巻)』勉誠社、1993 年）は二人の交友関係を概括的に論じ、諸田龍美「元稹との永訣―白居易「微之を祭る文」をめぐって―」(『下定雅弘教授退休記念号・中国文史論叢』8、2012 年）は、元稹の死に対する白居易の激情に焦点を絞って論じている。

[4] 作品番号は、花房前掲書〈1960〉所収「綜合作品表」に拠る。以下同様。

[5] 特に当該詩の第三・四句は、大江維時『千載佳句』上・時節部・八月十五夜、藤原公任『和漢朗詠集』巻上・秋・十五夜付月に採録されて広まり、また、紫式部『源氏物語』須磨の巻で、光源氏が都の人々を思って朗誦していることでも知られる。本詩の日本文学への影響については、岡村繁『白氏文集（三)』(明治書院・新釈漢文大系、1988 年）120―122 頁の「余説」に詳しい。

[6] 白居易詩の繫年については、花房前掲書〈1960〉所収「綜合作品表」を参照。

[7] 白居易の作品は、那波本を底本とする岡村繁『白氏文集』(明治書院・新釈漢文大系、1988―2018 年）に拠って提示する。以下同様。

[8] 花房前掲書〈1971〉所収「白居易年譜」を参照。白居易の閲歴については以下同様。

[9] 岡村前掲書（注 5）120 頁を参照。

[10] 以上、諸々の建築物の位置関係については、徐松『唐両京城坊考』巻一、及び平岡武夫編『唐代の長安と洛陽・地図編（唐代研究のしおり第七)』(京都大学人文科学研究所、1956 年）所収第三〇図「大明宮図（四)」(『陝西通志』巻七十二、沈青崖「唐東内図」）を参照。

[11] 元稹の作品は、1956 年文学古籍刊行社印行の影宋抄本『元氏長慶集』を底本とする冀勤『元稹集』(中華書局・中国古典文学基本叢書、1982 年）に拠って提示する。以下同様。

[12] 楊軍『元稹集編年箋注（詩歌巻)』(三秦出版社、2002 年）336 頁、周相録『元稹集校注』(上海古籍出版社、2011 年）547 頁、呉偉斌輯佚編年箋注『新編元稹集』(三秦出版社、2015 年）2381 頁。

[13] 前川幸雄「「八月十五日夜　禁中に独り直し　月に対して元九を憶ふ」とその和篇」(『国語界』18、1975 年）も、このような構成で本詩を把握している。

[14] 平岡前掲書（注 3）を参照。

[15] 徐松前掲書（注 10）巻三を参照。

[16] 徐松『登科記考』の各当該年、及び附考・進士科を参照。

[17] 呉汝煜『唐五代人交往詩索引』(上海古籍出版社、1993 年）を参照。

[18] 『唐律疏議』巻二十六に、「諸犯夜者、笞二十。有故者、不坐（諸の夜を犯すは、笞二十。故有るは、坐せず)」、その注に「閉門皷後、開門皷前行者、皆為犯夜。故、謂公事急速、及吉凶疾病之類（閉門の皷の後、開門の皷の前に行くは、皆夜を犯すと為す。故とは、公事の急速、及び吉凶疾病の類を謂ふ)」とある。

[19] 陳翀「友の亡妻に代わって詩を賦す白居易―元稹の妻韋叢の死とその悼亡唱和詩―」(『日本中国学会報』59、2007 年）に詳しい。

[20] 花房前掲書〈1960〉所収「綜合作品表」のほか、朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、1988 年)、謝思煒『白居易詩集校注』(中華書局、2006 年）も同じ。

[21] 「得楽天書」が白居易「与微之書」を受けて作られたものだとする推定については、呉偉斌前掲書（注 12）4288―4292 頁を参照。